［第 21 回　常民文化研究講座］

民具を語る

民具を語る 3
日時　2017 年 5 月 31 日（水）13:00～15:00
会場　神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 911 室（日本常民文化研究所）
発表　「アイヌの北方交易と和人社会―アツシ・蝦夷錦・ラッコ皮―」
　　大塚和義（国立民族学博物館 名誉教授・日本常民文化研究所 客員研究員）

アイヌ民族文化の国際性

佐野　賢治

長年アイヌ文化研究を先導されてきた国立民族学博物館名誉教授、大塚和義氏は衣料・衣生活を中心にアイヌ民族の民俗文化の性格について話された。最初にアイヌの“民族”概念を「アイヌという固有の DNA はなく、その文化の中で生きればアイヌ民族」であるとユニホームに例えて説かれ、その具体例として、北海道・樺太・千島アイヌの衣料の素材、鮭皮・樹皮・毛皮などの実態を文献、また自身のフィールドワークを含めた豊富な資料をスライドを用いて解説された。引き続き、

写真 1　研究会風景

ロシアの毛皮商人による収奪、山丹交易における蝦夷錦、北前船によるアツシの流通、浮世絵に描かれたアイヌ模様など、アイヌ民族に関わる衣料がユーラシア大陸のみならずアメリカ北西海岸まで、世界史の動向と絡めて分布している背景を説明され、結びとしてガラス玉、ビーズを事例に民具を指標にしての国際比較の重要性を指摘された。

2020 年東京オリンピック開催の年に北海道白老に国立のアイヌ民族博物館が開設される。北海道の先住民がアイヌ民族であったことを国際的に紹介する機会ともなる。日本国内においてもアイヌ文化は一般的に観光資源と捉えられ、その実態は深く理解されてこなかった。大塚氏の今回の北方少数民族、ロシアとの交流史、日本史との関係を含めて、具体的に衣料関係の民具を事例に学術的に語られた内容は当日の参加者に大きな刺激を与え、日本国民文化におけるアイヌ民族文化の有り方を改めて考えさせられた。質疑応答も民族の定義をはじめ多方面にわたり盛会裏に終了した。

写真 2　大塚和義氏

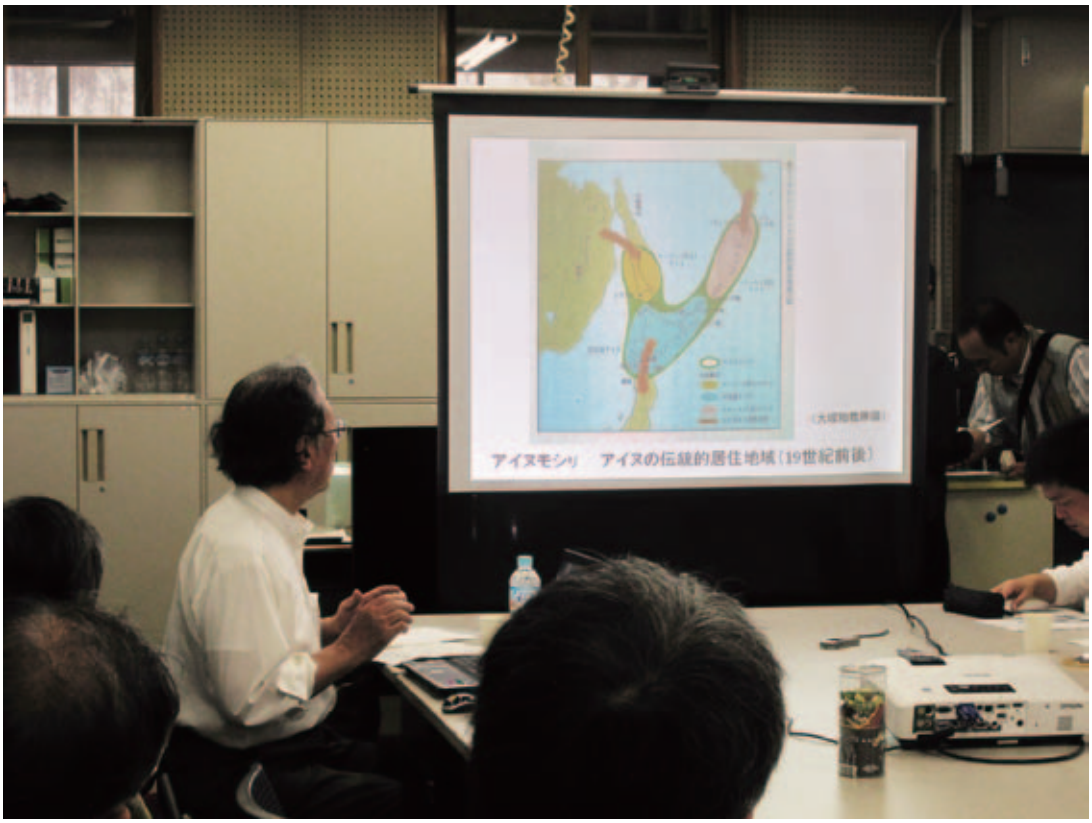

写真 3　画面を利用しての発表